

中世・近代における和弓の発展と衰退～それぞれの時代が求めた弓の役割とは何か～

Development and the decline of the Japanese bow in the middle ages and the modern times.～What is the role that each times demanded?～

1K05B045

指導教員

主査 石井昌幸先生

岡 明日香

副査 葛西順一先生

日本の中世・近代において、それぞれの時代で弓とはどのような役割を担っていたのかを社会背景と照らし合わせながら考えることによって、日本人にとって弓とは一体何であったのかの一端を明らかにしていくことが本研究の意図である。

第1章では、和弓の成立から発展までの概要について触れ、平安期以降戦闘のための武器として重宝されてきた弓の姿を追った。そして、その武器としての弓の価値が変化する契機となった出来事を鉄砲の伝来だと考え、その後の弓のあり方について論じている。鉄砲の伝来後も弓が戦場から消えることはなく、その理由として当時の鉄砲の性能や、財政的な問題を挙げている。つまり、日本古来より続く和弓は戦国期以降衰退し途絶えていくのではなく、武器として、また、心身の鍛錬を行う道具として担う役割を変えて発展していくのである。そしてその傾向は、泰平の世となる江戸時代においていっそう顕著なものとなる。

第2章では、古流である小笠原流や武田流についてと、室町中期に発生したといわれる新興弓術である日置流について詳しく述べ、その流れを汲む吉田流やさらにはその支流である日置流十派についての説明を行っている。これらの説明を踏まえた上で、流派の起因と分派活動が盛んに行われた理由の一端を明らかにしていく。まず流派の起因については、室町時代に弓術で勢力を誇っていた古流の小笠原氏流や武田流の弓術は武家・公家の弓射行事において主に行われ、それは非常に形式的なものになってしまった。しかし、時代は戦の絶えない時代であり、弓に求められた本当の役割とは実戦で役立つ必殺

の奥儀だったのである。この矛盾に疑問を抱いた日置弾正正次が一流を興し、時代の流れに沿った弓術を発案したということにあるのだと考えられる。また、分派活動が盛んに行われた理由としては、流派の継承の形態や、室町時代末期の幕府が有名無実化していたことなどを考慮にいれた世の中の権力図が関係していたのであらうと考えられる。

第3章では、江戸時代末期から明治時代初期にかけての弓道の衰退していく様子を追い、そこから大日本武徳会創設に至るまでの流れや、その後の弓道の普及について述べている。しかし、この大日本武徳会は当初は近代化を奨励する政府によって衰退の一途をたどらされた武道を再興するために組織された団体だったにも関わらず、途中から官民一体の体制を強調し、政府と民間が一体となって武道を奨励していくことになるのだが、ここに「創られた伝統」の存在を垣間見ることができると考えられる。現在、当たり前のように古来から続いていると考えられている弓道は、実は近代になって人工的に作り出された伝統なのである。なぜそのようなことを政府がする必要があったのかと言うと、身体鍛錬はもちろんのこと、国民にナショナリズムのイデオロギーを構築させるためであり、そのことが戦争の勃発とともに非常に重要な意味を持つようになってくるのである。つまり、現代の弓道とは古来行われていた弓道とは違う形を成しており、近代になって国民感情をコントロールするために生み出された道具としての弓道に端を発するものなのである。

以上に述べたことがらから、まとめとして社会的

背景と弓の担う役割の変化には非常に密接な関わりがあり、弓の役割が変化する時は時代も大きく変化していることがわかる。日本人にとってそう

した「弓」とは時代をうつす鏡であり、心身ともに日本人たるものを形成してきたかけがえのないものである。